マイナス×マイナス=プラス∞（無限大）

宮城県柴田農林高等学校 動物科学科　3年　髙橋 大翔

私は将来、家業である酪農を継ぐつもりです。現在、飼育している頭数は約30頭で規模は小さいですが、昔から続けてきた家業です。私の家は宮城県白石市の蔵王山の麓の中山間地域にあります。小さい頃から毎日牛舎に通い、牛に牧草を食べさせたり、ブラシがけをしたり、子牛にミルクを飲ませるなどすることが当たり前の日々を過ごしていました。

ある日、父が突然、「いいものを見せてやるから牛舎にきな」と呼ばれて行ってみると、いつもブラシがけをしていた牛の一頭が横たわって苦しそうにしていました。その牛の様子を見た時、感覚的に子牛が産まれることがわかりました。そして、少し出てきた子牛の足に父と祖母がロープをかけ、引っ張り出しました。牛の出産を見たのはその時がはじめてで、その光景が今でも私の脳裏に焼きついています。

さらにある日、産まれてくる牛もいれば死んでしまう牛もいることを知りました。子牛の成長を見に牛舎に行くと、いつもいるはずの牛がおらず、一頭分のスペースが空いていました。父になぜ空いているのかと聞いたところ、「今朝倒れて死んでいたんだ」とのことでした。私はこの時はまだ実感がわかずただ漠然と死んでしまったのかと思う程度でしたが、今となっては動物の生死を間近で感じることのできる貴重な職業であると自負しています。

中学校に入ると酪農経営に関して具体的に考えられるようになり、子どもの頃に行っていた作業も違う視点から考えられるようになりました。また、父から除ふん作業を任されるようになり、自分なりに効率よく行う方法や敷きわらのタイミング、牛にとって心地よいブラッシングはどんな方法なのだろうかと考えながら作業にあたれるようになりました。

そして、中学1年生もまもなく終わろうとしていた2011年3月11日に東日本大震災が起こりました。牛舎は停電になり、いつもの搾乳ができなくなりました。その時、家族は一瞬パニックに陥りましたが、目の前にいる牛のことを最優先に考え、父、母、祖母と私の4人で電気が回復するまで手作業で搾乳を行いました。その時私は、ライフラインが止まって困るのは人間だけではないことを知りました。そんな最中、テレビには福島第一原子力発電所が機能を停止し、爆発している様子が映し出されていました。正直、私はどこか異国の地で起こっている様子だと人ごとのように思っていました。しかし、毎日テレビを見ていると、過去にアメリカで起きた原発事故では80km圏内は放射能汚染の影響が大きいからといった理由で避難していたことを知りました。そこで、私の家から福島第一原発までの距離を計算したみたところ、直線距離で74kmほどであることを知りました。その時、牛の姿を見ながら涙が止まりませんでした。

中学３年生の進路を決める時期になり、家業を継ぐために農業高校へ進むか、もしくは全く別の道に進むか、それまでで一番悩みました。そこで決め手になったのは、小さい頃から感じていた酪農のもつ可能性に賭けてみたいという思いがすべてのマイナス材料を払拭できたからでした。

そして、私は無事柴田農林高等学校への入学を決め、２年次から畜産専攻班として、牛の管理や調教，動物の生態を学び，現在は将来酪農家になるかどうかの自分への意思確認の時期となる３年生の夏休みにさしかかろうとしています。

私は柴田農林高等学校で日本の農業の現状について勉強し、様々な問題があることを知りました。加えて、私の住む地域では東日本大震災から４年を過ぎた今でも風評被害を受けています。そこでこのようなマイナスのイメージがますます深刻化する現状の中、酪農経営に活路はあるのだろうかと改めて考えてみました。

私の住む地域は前述の通りの場所で、少子高齢化やそれに伴う農業後継者不足、その他様々な理由で年々耕作放棄地が増えてきています。私の家は一般的なストールバーンで１頭ずつのスペースで飼育していますが、これでは今の30頭以上に増やすためには新たに牛舎を設ける必要があり、設備費が大きくかかると考えられます。そこで、近くの耕作放棄地をそのまま野山に戻すのではなく、牛を放牧するための放牧地として利用できないかと考えています。そして、今までのストールバーンではなくフリーストールバーンにすれば、設備費を最小限に抑えられ、牛をより多く飼育できることが可能であると考えています。また、牛にとって動物本来の生き方ができるので、ストレスの軽減につながり良質な牛乳が搾乳できたり、強健な子牛が生まれやすくなったりするのではないかと考えています。さらには、耕作放棄地に牧草を植え、放牧地で牧草を食べさせてあげれば飼料購入量が減り、飼料の自給率向上にもつながると考えています。幸い私の住む地域では放射性物質の濃度は国の基準を大幅に下回っており安全です。そして何より、耕作放棄地の利用は私の地域の昔からある農業景観が損なわれることなく持続されることが期待されます。

次に、この考え方と地産地消の考え方を融合した六次産業化の取り組みを行うことを目指していきます。近くには蔵王酪農ファームという酪農を先進的に行っているところがあり、私はその取り組みを見本にできるところから少しずつ実践し、さらにはオリジナルの技術開発や加工品作りに挑戦してみたいと思っています。

私は今、高校最後のプロジェクト活動の中で、畜産排泄物の利用方法について研究しています。その中で、堆肥の作り方の見直しはもちろん、効率よくエネルギーを取る方法を模索したり、残った繊維質を使って何か作れないだろうかと考えたり、排泄物の栄養成分を野菜栽培やキノコ栽培に利用できないだろうかと様々な実験を行っています。卒業までにどこまでできるかわかりませんが、将来日本の酪農家の一員として、さらに魅力ある産業に

するために今のうちから頭と体でたくさん汗をかきたいと思います。

まとめると、世間一般の畜産のマイナスのイメージは私にとっては大きなチャンスであるという結論に達しました。もちろん、何一つ簡単なことではなく、酪農家の先輩方からは笑われるかもしれません。しかし、私は酪農家の家に生まれて酪農の魅力にいつしかとりつかれた身です。どんな困難にも負けず一歩ずつ一歩ずつ確実に酪農を魅力ある産業にしていきたいと考えています。

私の好きな言葉、マイナス×マイナス＝プラス∞（無限大）。